

研究代表者 所属・職：看護学部・准教授

氏 名：古澤 亜矢子

研究課題名：母親が認識する育てにくい子どもに対して早期予防的介入による親の認識の変化

取り組み状況

フェアベーンは、人間が最も強く希望するのは人間どうしの情緒的接触であると述べている。しかしながら、情緒的接触が時として人間関係の中で暴力を生じることがある。現在、情緒的接触が強く求められる家庭内で生じる暴力について関心をもち、家庭内で生じる暴力による親子・家族介入を行っている。

研究者は、親子支援を何らかの脆弱性をもつ子と「育てにくさ」を感じる親への支援、子と上手く関われないと認識する親に対して PCIT (Parent-child Interaction Therapy: 親子相互交流療法)、子育てに悩む養育者の集団を対象とした教育研修 CARE (Child-Adult Relationship Enhancement) を実施している。これらを通して、思わず子どもに体罰をあたえてしまうかもしれない不安に苛まれている親、親自身の虐待体験、家庭内暴力より子育てに自信がもてない親に対して親としての自信の獲得、虐待予防を目指している。

本研究では、家庭内で生じる暴力から子育てに問題が生じる親子を対象に実施している PCIT (Parent-child Interaction Therapy: 親子相互交流療法)、育児に不安をもつ養育者を対象とした CARE (Child-Adult Relationship Enhancement) の評価を行うとともに、情緒的接触が必要とされる家族の中での暴力がなぜ生じるのか、次世代を担っていく子への影響について検討していく。そして、本研究の大きなテーマとして人との間に生じる暴力を解明していくことである。そこで、今年度の研究目標としては、PCIT、CARE を実施することで親の子に対する認識、親が感じるストレス、親としての自信の獲得についての変化を明らかにして、PCIT、CARE の効果とその関連を示すことが目的であり、その結果の一部を報告する。

研究成果の内容

①PCIT 実施の現状

一部の関わりを含め、終了しているケースは 8 ケースである(2 ケースは 4 月初旬に終了予定)。中でも PCIT 実施において特徴的なケースとしては、うつ病尺度(日本語版 BDI- II Beck Depression Inventory-Second Edition)が、高得点であったものが実施後最低値まで下がってきている。しかし、夫によるストレスが出現した時などは単発で上昇がみられていた。毎回のセッションで確認している ECBI (Eyberg Child Behavior Inventory: ECBI) も、最初は高得点を示したが、実施後下がってきており、母親の捉える子どもの問題数が低下していた。特徴的であったのは、母親の子どもの問題の捉え方について、「自分の子どもの思いは受け止めなければいけない」という思いに苦しんでいた母親が、PCIT のトレーニング、セラピストとのインタビューを通じて母親の葛藤が軽減出来ていた。それにより、子どもの問題を受け止められるようになり、子どもの衝動性が軽減出来ていた。より健康的な親子の関係が取り戻せるにつれ、母親は、子どもとの関係に自信が取り戻されてきた。同時に、夫との関係について、将来に向けて考え始めていた。母親自身の課題をもっている場合は、自分の精神状態を保つことで精いっぱいであり、子育てに目が向けられない状態になりやすい。しかし、子どもの成長は早い。早く母親と子どもの関係を健全化することが必要であり、それにより家族のあり方に目が向けられると考える。このように、成長が著しい子と親との関係を修復するためには、即効性が期待されるこの PCIT は、とても効果がある療法であると評価できる。

②CARE 実施の現状

2018 年度 3 月に 30 名の親を対象として、前半

2 時間、後半 2 時間の講座を 2 回実施した。子どもと遊びを通して関わるという心理教育である。頭で考えるというより演習を通して、実際に子の役、母親の役を体験し、親子の関わりを学んでもらう講座を実施した。子の役を実施することで、親の子に対する認識がかわったこと、前半の講座の後、宿題として自宅で実施してもらうことでよりわからない点が出て次の講座に臨み、さらに実施して体得できていた。2 回の講座を終了した対象者より、「これでいいんだという親としての自信が獲得できた」というコメントを頂いた。今年度は、1 講座のみしか開催出来なかったため、今後より実績を積みさらに CARE の有効性について評価を続けていく必要がある。